

第二十四回

# 白鳥省吾賞

受賞作品集

「自然」の詩

「人間愛」の詩



宮城県栗原市  
栗原市教育委員会  
白鳥省吾記念館



一般（高校生以上）の部

●最優秀賞

「うたう」

齋藤茂登子

●優秀賞

「新しい礼服」

河野 俊一

「夫婦茶碗」

丹野 幸子

●ふるさと賞

「雁群」

白鳥 美咲

●審査員奨励賞

「宇宙の密度は減少中」

菱沼 大生

小・中学生の部

●最優秀賞

「ため息」

菅原 瞳美

●優秀賞

「夏の雲軍団」

榎納 陽

「ありのぎょうれつ」

菅原 結菜

●特別賞

「波打ち際」

齋藤悠一郎

「鳥」

八巻 愛里

「交差」

水谷友理子

「蟬」

豊田 葉那

「線香花火」

内山 芽泉

ウジエ

《目次》

あいさつ ..... 栗原市長 佐藤 智 ..... 1

受賞作品

一般（高校生以上）の部 ..... 2

小・中学生の部 ..... 6

審査員選評

川中子 義勝 ..... 11

原田 勇男 ..... 12

佐々木 洋一 ..... 13

三浦 明博 ..... 14

渡辺 通子 ..... 15

寄稿「第23回白鳥省吾賞を受賞して」 為平 滯 ..... 16

白鳥省吾氏御令息あいさつ ..... 白鳥 東五 ..... 17

都道府県別応募状況 ..... 17

白鳥 省吾 略歴

- 1890年 宮城県栗原郡築館村(現在の栗原市築館)に生まれる。
- 1913年 早稲田大学英文学科卒業。
- 1914年 第1詩集『世界の一人』を自費出版。
- 1918年 ホイットマンの研究論文・訳詩を発表。
- 1919年 『民衆』第11号に白鳥省吾詩集掲載。詩集『大地の愛』出版。
- 1920年 ジャーナリストから詩壇の中心人物とされる。雑誌等に多数発表。新潮社『日本詩人』が創刊し編集者となる。
- 1922年 北原白秋と文学論争をする。
- 1926年 「大地舎」を創設し、詩誌『地上樂園』及び詩書の出版を始める。
- 1928年 詩人協会を結成。
- 1939年 大日本婦人連合会発行の月刊誌『女学生新聞』編集長となる。
- 1961年 日本農民文学会会長となる。
- 1962年 日本歌謡芸術協会会長となる。日本民謡協会文化章受賞。
- 1965年 築館町名誉町民となる。栗原郡名誉郡民となる。日本詩人連盟会長となる。
- 1968年 勲四等瑞宝章が授与される。
- 1973年 逝去。昭和天皇から銀杯が下賜される。



# あいさつ

栗原市長 佐藤 智



第二十四回白鳥省吾賞の各賞を受賞の榮に浴された皆様に、謹んでお祝いを申し上げます。

白鳥省吾賞は、郷土出身の民衆詩派詩人である白鳥省吾先生の偉業を顕彰し、市民の文化水準の向上に資することはもとより、多くの方に、白鳥省吾先生の取り組まれた民衆詩に触れていただくきっかけとするため、平成十一年度に創設いたしました。

二十四回目を数える今回は、全国各地から一般の部に一千編、小・中学生の部に四百二十六編、合計で千四百二十六編の作品が寄せられました。あらためて、ご応募いただいた皆様に心から感謝申し上げます。

白鳥省吾先生は、故郷の山河と民衆をこよなく愛し、農民の姿や純朴な人々の

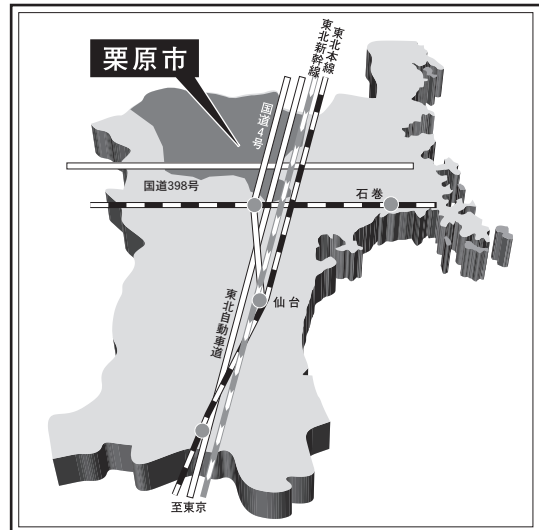
生活から、深い愛郷心と農民魂をもって民衆詩を詠いあげ、口語自由詩の発展に多くの偉業を残した民衆詩派の代表的詩人であります。

この白鳥省吾先生の功績や足跡を後世に伝えることを目的として、平成十年七月一日に白鳥省吾記念館が開館し、今まで多くの皆様にご来館いただいたいております。

栗原市は、多くの「自然」とそこに暮らす市民の「人間愛」に満ちた田園都市であります。白鳥省吾賞の作品主題として「自然」と「人間愛」は、その栗原市が誇り守るべき財産であり、この賞に寄せられた数多くの作品は市民の豊かな感性を育む糧となるものと確信しており、今後も多くの作品に出合えることを楽しみにしております。

結びに、審査員の皆様には、厳正な審査をしていただきましたことに感謝の意を表するとともに、白鳥省吾賞の事業実施にあたりご支援ご協力をいただきました関係各位に心から御礼を申し上げます、挨拶いたします。

宮城県栗原市



## 市章



デザインは、栗原市の頭文字、ひらがなの「くり」をモチーフにしたもので、シンプルにバランスよく、活力のある親しみやすい形で表現しています。

緑色は、自然たつぷりの田園都市をイメージし、中央の形は、栗原の象徴「栗駒山」と、米どころの作物「お米」を合わせて表現しています。

—平成十七年九月十五日制定—

# 一般(高校生以上)の部 受賞作品

最優秀賞



「うたう」

さいとう 齋藤 茂登子

岩手県盛岡市

おはよがすう リヤカーひいた農家の  
 おばあさんたちが夏の朝  
 野菜、花っこ、いらねすかあ  
 どうですかと 庭先でうたう  
 ふるさとの栗原若柳は  
 歌があふれる町だった  
 うたうの うたうの 歌で言うの  
 友だちを誘うのも  
 だれ子ちゃん、あーそびいませよ  
 登校も  
 それ美ちゃん、いーきいませよ  
 語尾を上げ気味で 歌で言うの  
 かいすうー アイスを買いにいくの  
 友だちと弟と夏の午後  
 かいすうーと お店の人に声かけて

雪の結晶形がついたアイスケースを  
 開けるの お目当ては当たりつき  
 バニラ味の棒アイス  
 銀紙ペラペラはがしてペロペロなめて  
 とけてトロトロ手がベタベタだけれど  
 棒に茶色の三文字があるかに夢中なの  
 あ、当たりだつちゃあ  
 当たったのはわたしなのに  
 棒のアタリを言うのは  
 友だちだった  
 夜は誰もが静かだった  
 迫川に白鳥がいる冬以外  
 うちの近くで声はしない  
 たまにたまに  
 「おぼんがすう」  
 こんばんは、あいさつが聞こえる  
 大人も子どもも 栗原の昔は音符  
 うたうの うたうの 歌で言うの  
 おらほの語り方(かだりがだ)  
 聞いてけらいん

いいとこだっぺ



優秀賞



### 「新しい礼服」

大分県大分市  
河野 俊一

大分県大分市

果実のように

わるい細胞を熟れさせながら

火照る体のおまえは

息を引き取る二週間前に

母親に連れられて

(いつ倒れてもいのように)

紳士服店へ行ったそうだと

私の礼服は

親父から譲り受けたもので

だいぶくたびれていたのだが

それが気になつていたんだと

私なんて

ちつとも気にしていなかったのに

おまえときたら

六月のディスプレイは

夏物入荷

あたりだったか

季節はどんどん生気をみなぎらせ

おまえは

どんどん衰えていく

私が次にそれを着るのは

自分の葬儀だと知っていて

選ぶ

いたいけなひとときが

みちあふれて震えながら

店の外まで流れ出していたことだろう

ながれだしたものを受けとめるのは

きつと

親と子の間に横たわる

狭くかぐわしい溝だ

溝に溜まってゆくものを

私はもう一度

その日のその店に戻つて

この手で掬いたい

黒いネクタイで

漏れる声をきつく縛りながら

優秀賞



### 「夫婦茶碗」

宮城県石巻市  
丹野 幸子

宮城県石巻市

娘の友人が焼いた土の器

白い釉薬のかかった粉引きの夫婦茶碗

ふつくらとあたたかく手に収まる小さいほ

うは食事制限されているあなたのごはん茶

碗 おおぶりでお抹茶も点てられるほうは

わたしの茶碗

結婚四十五年を二人で迎えられたあかしの

お祝いの贈り物

脳梗塞で右手の指にマヒが残ったあなたは

毎日洗いものを引き受けた

茶碗は水の中でリハビリをするあなたの手

から何度か滑つて桶の中で踊つた そして

小さく欠けて傷ついた

壊れたらまた焼いてもらうから

「気にしないで」と娘はむしろ洗いものを

する父を褒めた

あの人逝つて花橘の花びらのようになつ

くら優しい土のついの茶碗が残った

茶碗に遺したあの人の仕事

茶碗に遺した手の感覚

茶碗に遺ったふたりの暮らし

茶碗に遺ったあの人の後ろ姿

茶碗の欠け傷を見ると分かる

毎日洗いながら何を考えていたのか

清々しい目の先にあるもの

邪心のないところ

欠け傷をさすると分かる

今はもう

あなたは悲しみを走り抜けたのだと

なごりの傷は

深々と痛みを包み安らかに白灰色に溶け込

んで 時を経てはじめからあったもののよ

うに静かに残った

あなたとわたしの夫婦茶碗

ふるさと賞



「雁群」

しろとり  
白鳥 美咲

宮城県栗原市

落陽が地平の際でにじむ頃

梢の色も静かにゆれて

遠くさざめく彼方の予感

迎え待つ この小さき人間よ

あなたは一心にこぶしを握り

弾ける懐古にまごつきながら

深々とした空洞に息を詰まらせている

頭上ゆく影を追っておさなごは走る

負けじと声を張り上げ 鳴きまねて

あの日指さした人差し指のあかぎれは

雁の眼には映りはしない けれども

幾層の波間から透きこぼれた空の藍色は

全てのものの眼に 等しく反射して

それぞれの存在の確かさを教えてくれた

—わたしは何を見ていたのだろう

煌々とした照明灯は 白けた顔をして

照らすべきものを持たずに乱雑に光るだけ

手入れし忘れた指のささくればかりが

目について ポケットに隠しながら

てんででたらめな視線を逃れ歩いた路地

かすれた道路の白線 薄汚れた靴

誰も読まなかったチラシ 顔のない人々

意味を返さぬ雑踏 見捨てられた残像

断定できない自分の背中を 鏡越しに見ては

「わたし」を定義づけて安堵する日々

—わたしは何を見たかったのだろう

それは 憧憬が眩むほど清純な藍色

痺れ悦ぶほどの声の重幕

悲哀もなければ 郷愁もない

突風に舞う盛り火のごとく群形をなびかせ

ひたすらに血潮を沸騰させ

何も無い空に挑んできた 鮮烈な命の結実

—ゆけ雁群よ わたしはここにいた

赤らんだ心は震え まるで首叉のよう

あなたは一呼吸し 見えぬ言葉で息を吐いた



審査員奨励賞

「宇宙の密度は減少中」

菱沼 大生 ひしぬま だいき

山形県天童市

宇宙は膨張し続けてるんだって、地学の授業で言ってた。きつと毎日、北極星は僕たちから遠ざかっていて。きつといつか、僕たちから見つからない場所へ行くのだろう。そして、小さくなつていった光の粒は、月みたいに来月になったからといって、大きくなることはない。

そうやって

宇宙の密度は小さくなっていき

天の川が一つ一つの星に分裂したとき

僕たちの距離は何光年になっているのだろうか

海という生命の根源から疎外された僕たちの  
はるか昔の親戚は、陸にあがった、火を起こ  
した、言葉を紡いだ、のだ。

インターネットという僕たちのナワバリは、  
世界中を繋ぐ、言語を結ぶ、僕たちの距離は  
縮まる、はずだった。

画面上の僕たちは

近くて遠い

その言葉に

温度はない

縮まったと思ひ込んでいた

僕たちの距離は

本当は何光年あるのか

最低密度の陸にポツリと居る僕たちのはるか  
先の親戚は、無重力の海に還る、紡がれた言  
葉は果てなく漂う、のだろうか。

北極星が北を指し示しているうちに

僕の言葉に重力が働くうちに

僕たちの間の距離がたかが知れてるうちに

言葉をつなぎとめておこう



# 小・中学生の部 受賞作品

最優秀賞

## 「ため息」

すがわら  
菅原 ひとみ  
瞳美

宮城県栗原市立

築館中学校二年

はあ。口から厭世的な吐息をもらす。

朝の耳障りな時計を黙らせて

寝惚け眼をこすりながら、

少し皺のついた制服に腕を通す。

また今日がやってきた。

はあ。口から厭世的な吐息をもらす。

朝から騒騒しい校舎の中。

まだ授業が始まってないっていうのにさ。

疎ましく思いながら、

眠気の取れない目をして机にふせる。

はあ。口から厭世的な吐息をもらす。

教壇に立つ教師とやかましい生徒。

淡々と話しているが脱線する教師。

さらにうるさくなる教室。

馬鹿らしくなり、

きれいな秋晴れの空に目を移した。

はあ。口から厭世的な吐息をもらす。

放課後、活発になる生徒たち。

どうしてそんなに元気なんだい。

これから体力が消耗するっていうのにさ。

つかれたころには、

すっかり日が傾いていた。

はあ。口から厭世的な吐息をもらす。

帰路につくと紅の夕空が広がっていた。

紅の夕空に染まっていく田舎道。

紅の夕空に染まっていく稲穂。

紅の夕空に染まっていく私の心。

なんだか目頭が熱くなった。

はあ。口から楽天的な吐息がもれた。

また今日が去っていく。





優秀賞



「夏の雲軍団」

まきの  
檣納 陽

京都教育大学附属  
京都小中学校初等部三年

雲軍団がせめてきた

そらはまつくらどんより雲

ゆきのようなふわふわ雲

わたあめそつくりもふもふ雲

いろんな雲がまざりあい

できているのが雲軍団

西から来たのは雲軍団

東からも雲軍団

これはたたかうぞ

どちらも前からつつこんだ

どちらもまける気がしない

白と黒がまざりあい

たちまち雲はつながって

さいごは

もつと もつと もつと

きよだいな雲軍団になっていた

雲軍団はどうした

やってきたのは草原だ

だがそこは雨がしばらくふっていない

雲軍団は大きな雨をふらせた

すると草原はきれいなみどりにもどった

つかれた雲軍団

力つきてかいさん

「またあつまろう」と聞こえた

優秀賞



「ありのぎょうれつ」

すがわら  
菅原 結菜

宮城県栗原市立  
鶯沢小学校三年

朝、げんかんでありのぎょうれつをみつけた

どこに行くのか、ついていった

となりの家までいった

ありつて家ぞくついているのかな

おじいちゃんあり

おばあちゃんあり

おとうさんあり

おかあさんあり

おねえちゃんあり

おにいちゃんあり

わたしがあつたら

おにいちゃんとおわたしでボールで遊んだりするのかな

るのかな

じゅぎょう中もきになって、しゅう中できなかった

かった

朝からずっと歩いていたのかな

夜になったらねるのかな

明日は、早起きして見てみよう

朝早く起きて見たら

ありのぎょうれつがあつた

ありもがんばつてるのかな

わたしもがんばろうかな

特別賞



「波打ち際」

さいとう  
齋藤 悠一郎

茨城大学教育学部  
附属中学校二年

波打ち際を歩いていく

少しずつ

海面がせり上がっていることに

気がついてはいたけれど

見て見ぬふりをして

昔の足跡は

すっかり波に

かき消され

今さら

後戻りなどできやしない

波間に見え隠れする

手紙が詰められたペットボトル

片っ端から飲みこんで

手紙の用事も分からぬまま

鯨は岸辺で待ちぼうけ

大震災が起こって

大雨が降って

山が崩れ川が氾濫して

ウイルスが蔓延して

ミサイルが飛び交って

切り立った崖に波しぶきがあがり

行く手を阻んでいる

潮騒にまじって

かすかに聞こえる

鯨の断末魔の叫び

夕波に

手紙の断片が

一面に漂う

特別賞



「鳥」

やまき 八巻  
あいらり 愛里

宮城県栗原市立  
築館小学校六年

すずしい春の朝に

おなががすいた小鳥が

チュン チュンと鳴く

親鳥が子鳥の口にエサを運ぶ

そうすると鳴きやんだ

すずしい夏の昼間に

おなががすいた鳥が

カー カーと鳴く

空からパタ パタとおりて

ゴミをあさり

生ゴミを食べている

食べおわると鳴きやんだ

そして空にとんでいった

雨のふっている秋の夕方に

鳥がゆらゆらとおりてくる

おりたら羽をぶる ぶるとふって

水をとばした

寒い冬の朝に

鳥が柱にとまって

丸くなっている

一羽が柱からおりて

雪の上ののると

たくさん足あとをつけて

ピョン ピョンととんで

去っていった

あつい夏の昼に

カラスが木の日かげに

とまっている

空にとんだ

ほかの小鳥やツバメも

特別賞



「交差」

みずたに  
水谷

ゆりこ  
友理子

フェリス女学院  
中学校三年

電車の中 三人席の真ん中が空いている  
私が座ろうとしているのを見ると  
若い外国人の男性が  
にっこり笑って 少し詰めてくれた

いい人だな

席に座ると

私は英単語帳とり出して暗記にとりかかる

put away…しまっ、片付ける

correct…正しい、正確な

ぱつと目を上げたとき

隣に座るさっきの外国人男性も

私と同じように

単語帳をひらいていたことに気がついた

日本語…Japanese  
仕事…work

小さなノートにはぎっしりと

英語と少しつぶれた漢字が書いてある

私は 日本語から英語を

その人は 英語から日本語を

国籍も年齢も

違うふたりなのに

互いの言葉が交差している

この一瞬

私たちが学び続けて

ふたつの言語が ぴったりと重なるとき

また逢えたらいい

今度は一瞬の交差ではなく

ふたりの友人の再会として

審査員奨励賞

「記憶のベンチ」

ウジエ

宮城県栗原市立  
築館中学校三年

昔はここで

誰かが本を読んでいた

昔はここで

誰かが涙を流してた

一昨日はここで

誰かが座って居眠りしていて

昨日はここで

誰かが真剣な目で悩んでいた

今日来てみたら

私がそこに座っていた

そこには昔の私がいて

そこには今日の私がいた

ちよっぴり古くて

でもとても居心地がいい

私の大事な大事な記憶のベンチ



## 審査員奨励賞

## 「蝉」

うちやま  
内山 芽泉岡崎市立  
竜海中学校三年

今年もまた暑い夏が君たちを連れてくる

一、二、三、二十：

目視で数えるだけでも凄い数

庭の木に蝉がたわわになっっている

夏限定の騒がしい木

変な表現がびったりな我が家の木

君たちは他の木には目もくれず

約束をしたかのように集合し

会話をしているようだ

なんだか修学旅行の私たちと重なって見える

久々に嬉しくて眠れない

楽しくて心が躍る

会話が弾んでとまらない

飛んで騒いでみたくなる

案外 蝉も人も変わらないのかも

窮屈だった分 寂しかった分 苦しかった分

きつと楽しめる きつと喜べる

優しくいれる

そんな気がする

ちよつと青春つばいな

青春つてさ

大人が子供を見て使う言葉だと思つてた

けれど違う

もしかしたら私たちは今

青春のど真ん中にいるのかもしれない

## 審査員奨励賞

## 「線香花火」

とよた  
豊田 はな  
葉那神戸市立  
星陵台中学校一年

あたまの先つぼに火がつく

みんなとはちよつぴりちがう

やさしい花火

生まれた火の粉が

はじけだす

パチパチ バチバチ

あたまの先つぼが揺れる

みんなとはちよつぴりちがう

素敵な花火

いのちの長さは

僕にもわからない

ハラハラ ドキドキ

あたまの先つぼが輝く

みんなとはちよつぴりちがう

特別な花火

ひと夏の最後を担う

大切な役目があるんだ

ギラギラ キラキラ

あたまの先つぼが落ちる

みんなとはちよつぴりちがう

せつない花火

夏と

僕の一瞬が終わる

静かな夜

## 第二十四回白鳥省吾賞審査員選評

明るさを基調とした作品が

多かった



川中子 義勝

長びくコロナ禍が人々の心を重くしているが、最終選考作品には明るさを基調としたものが多かった。最優秀賞を得たのは、齋藤茂登子さんの「うたう」。栗原出身の方で、故郷への想いを、詩の表現として優れた形で作品化した。子どもの頃の経験を、なおその場に臨むかのよう語る。その言葉は、この地方の言い回しと結んで、命溢れる躍動感に満ちている。「歌で言うの」「買いにくい」「夢中なの」と、語尾に「の」を繰り返して、強調するリズムが独特の韻を形作る。「大人も子どもも 栗原の昔は音符」。郷土とその人間への愛を独特の口調で訴える語りかけは、手放して共感を呼ぶ。優秀賞のお二人の作品にも、最優秀賞に劣らず心惹かれた。いずれも死別を主題とし、想う相手への深い気持ちが届められている。河野俊一さんの「新しい礼服」は、死期間近な息子から、葬儀のための喪服を贈られたという経験を物語る。亡き息子に「おまえ」と語りかけるその口調は、父を敬う息子の姿を偲んで、哀調を響かせる。詩の

終わりに、感情を抑えつつも、父と子の絆の深さを語る言葉は感動的だ。出来事を通し人物を描き出す表現に、長く詩を書いてきた方の巧みを見る。丹野幸子さんの「夫婦茶碗」も、事物に即して想いを述べる作品。茶碗の大きさが一般の夫婦とは反対。だが、詩の本当の主題は、茶碗に残った傷の姿。洗い物を引き受けた夫が、身体の麻痺ゆえに残したその傷は、夫が生きた証として生前の姿を彷彿させる。終行は言わないう方が余韻が残ると思われた。雁の群と「わたし」の交歓（共鳴）を記した白鳥美咲さんの「雁群」は、ふるさと賞に相応しい。幼時の体験を叙述する表現は大仰でも、感動を訴えたいという気持ちはよく伝わってくる。終連の凝集に力を感じた。奨励賞、菱沼大生さんの「宇宙の密度は減少中」は、インターネット時代の人間の在り方を想う。言葉は静かだが、弘大な時に向きあおうとする心の若々しさが印象深い。

かわなご よし かつ  
川中子 義勝

プロフィール

元日本詩人クラブ会長、日本現代詩人会会員、日本文藝家協会会員、東京大学名誉教授  
埼玉県さいたま市在住

略歴

東京大学修士課程修了。「詩は人類の母語」と唱え、ゲーテやロマン主義に多大な影響を与えたJ・G・ハーマンの研究で、1998年（平成10年）アマリエ・フォン・ガリツイン賞受賞（ドイツ）。2010年（平成22年）日本詩人クラブ詩界賞、2016年（平成28年）秋谷豊・詩鳩賞、2017年（平成29年）第23回埼玉詩人賞受賞。日本詩人クラブ新人賞、同詩界賞選考委員などを重ね、第34回現代詩人賞選考委員長。日本現代詩歌文学館振興会評議員。詩誌「ERA」「嶺」を編集・発行。月刊誌「詩と思想」編集長。

著書

詩集「眩しい光」「ものみな声を」「ときの薫りに」「遙かな掌の記憶」「廻るときを」「魚の影鳥の影」「ふたつの世界」など。詩絵本・エッセイ「ふゆごもり」「ミンナと人形遣い」「散策の小径」、評論「詩人イエス・ドイッ文学から見た聖書詩学・序説」、詩学講義、共著「詩学入門」、翻訳「北方の博士・ハーマン著作選」「神への問い―ドイッ詩における神義論的問いの由来と行方」など。

## ほのぼのとした故郷や

## 夫婦愛



原田 勇 男

今回の応募原稿を一読して、故郷や家族愛、夫婦愛を書いた作品に惹かれた。傑出した作品には出会えなかったが、自然愛や人間愛を讃える白鳥省吾賞にふさわしい応募作品が数多く集まった点を評価したい。

齋藤茂登子さんの「うたう」は、盛岡在住の女性が故郷の栗原若柳のくらしについて方言を使いながら軽快なテンポで表現している。当初、私は「ふるさと賞」に最適だと思ったが、この賞は栗原在住が条件だそうで私の勘違いだった。子ども同士や住民同士の会話が「うたうのうたうの 歌で言うの」という独特の語り口で、明るく親密な交流を印象深く描いて最優秀作品に選ばれた。

河野俊一さんの「新しい礼服」は、死期を悟った息子が、自分の葬式で父親の着る礼服は親から譲り受けた古着なので、新しい礼服を誂えようとして母に連れられて紳士服店へ出掛けたという。父親にしてみればちっとも気にしていなかったが、息子には気になっていたのだ。これも家族愛の姿だろう。息子の深く優しい心遣いが哀切である。

丹野幸子さんの「夫婦茶碗」は四十五年連れ添った妻から亡くなった夫への思い出を平易な言葉で書いている。夫は脳梗塞を患い右の指に麻痺が残った。しかし毎日洗いの係を引き受けた。茶碗はリハビリをする夫の手から滑って、小さく欠けて傷ついた。妻は欠けた茶碗の傷をさすりながら、夫が茶碗に残した暮らしの痕跡をなつかしむ。

ふるさと賞は白鳥美咲さんの「雁群」。沼から飛び立ち、群形を作って空を舞う雁の群れ。ひたすら血潮を沸騰させ、その命を燃焼させる雁の姿に魅せられ、人もまた再生の意志を掻き立てられる。

審査員奨励賞は山形県の高校三年・菱沼大生さん（十七）の「宇宙の密度は減少中」。宇宙が膨張すれば、宇宙の密度は小さくなる。インターネットで世界を結ぶ距離が短いうちに、言葉を繋ぎとめようと若者らしく主張する。

原田 勇 男

## プロフィール

日本現代詩人会会員、日本詩歌文学館振興会評議員、宮城県詩人会顧問  
宮城県仙台市在住

## 略歴

東京生まれ。岩手県松尾村（現八幡平市松尾）で育つ。盛岡工業高卒。早稲田大学在学中の二十歳から詩を書き始め、初期の「現代詩手帖」に投稿。詩誌「コルサル」「エスプリ」「現代詩手帖」などに詩を発表。1968年（昭和43年）、東京から仙台へ移住。1987年（昭和62年）度宮城県芸術選奨、2008年（平成20年）度宮城県教育文化功労者表彰。第50回H氏賞選考委員、第30回現代詩人賞選考委員長、2006年（平成18年）より宮城県高等学校文芸コンクール詩部門審査委員長。

## 著書

詩集「北の旅」「炎の樹」「火の奥」「サード」、詩画集「夢の漂流物」（画・上野憲男）、詩集「エリック・サティの午後」「水惑星の北半球のまちで」「何億光年の彼方から」「炎の樹連禱」「かけがえのない魂の声を」、評論集「東日本大震災以後の海辺を歩く―みちのくからの声」、現代詩文庫234「原田勇男詩集」（思潮社）など。



## 親しみやすくホットな作品



佐々木 洋 一

一般の部は、応募数一千編の作品を原田審査員と半分ずつ読み、三十五編を第一次通過としました。最終選考は川中子委員長のもと、各作品に各々が最高十点の持ち点で評価、計二十点以上の作品に審査委員推薦を加えた十四編を対象に検討しました。

今回は、本賞のテーマである「自然」「人間愛」がより豊かに表現された作品が多かったように思います。また、地元栗原や高校生の作品では、実力のあるものが揃っていました。中には近親者の死をテーマにした作品も何編があったのですが、死を前向きに捉えることで、痛みから解放されていました。受賞作は、親しみやすくホットな作品となったのが特徴と言えるかも知れません。

最優秀賞の齋藤茂登子「うたう」は、岩手県盛岡市に住んでいる作者が、生まれ故郷栗原のむかしの様子を活写。遊びの情景や駄菓子屋でのやりとり、夜の静けさなどが懐かしく蘇ってきます。リズムよく歌われているので、一緒に口ずさみたくなる作品です。故郷を離れた人にとっては、故郷はやはり「いいところだっぺ」な

のかも知れません。優秀賞の河野俊一「新しい礼服」は、自分が亡くなることを予感した息子が、気になつていた父親の古い礼服を新しいものに買い替える。新しい礼服を父親が着るのは、自分の死が最初であることを知りながら。息子と父親の間にある溝を埋める心遣いが憎い。さりげない表現が一層深い思いに繋がっています。同じく優秀賞の丹野幸子「夫婦茶碗」は、亡くなった夫への愛情や家族のおもいやりが真つすぐ伝わってくる作品。読みながら、わたしと家族はどうなのか、おおいに自省させられました。ふるさと賞の候補は、白鳥美咲「雁群」と小野寺禮子「続青い芽よ」で、雁の群れから自己存在のありようをしつかりと見つめ直した力強い作品「雁群」を選びました。奨励賞の候補は、高校生の菱沼大生「宇宙の密度は減少中」と板東ななみ「片蔭」で、「宇宙の密度は減少中」を選びました。どちらも対象の捉え方が新鮮で、力量や将来性を感じます。是非、書き続けて欲しい。

ささき よういち  
佐々木 洋 一

## プロフィール

日本現代詩人会会員、日本詩人クラブ会員、詩人会議運営委員、日本現代詩歌文学館振興会評議員、日本文藝家協会会員、宮城県詩人会会長

宮城県栗原市在住

## 略歴

宮城県栗原郡栗駒町（現在の栗原市栗駒）生まれ。1981年（昭和56年）、詩集「星々」により第20回晩翠賞を受賞。1998年（平成10年）度宮城県芸術選奨を受賞。1999年（平成11年）、詩集「キムラ」により第27回壺井繁治賞を受賞。第1回モデラート賞受賞。第51回・第64回日氏賞選考委員。晩翠わかば賞・あおば賞選考委員。第41回から50回壺井繁治賞選考委員。第37回現代詩人賞選考委員。

## 著書

詩集「未来サヤンカの村」「うれうれうぐすす小人」「星々」、新鋭詩人シリーズ「佐々木洋一詩集」、詩集「01」、詩選集「佐々木洋一詩集」、詩集「アイヤヤチャア」「キムラ」「ここ、あそこ」、日本現代詩文庫「佐々木洋一詩集」、現代詩の10人「アンソロジー佐々木洋一」など。

## 継続は力なりを実感



三浦 明博

最優秀賞・菅原瞳美さん「ため息」は、「厭世的な吐息をもらす」という言葉のくり返して学校の一日を描いた詩で、斜に構えたような思春期ならではの感じがよく伝わる。最後、紅色の夕空を見て「楽天的な吐息がもれた」で結んだところがいい。優秀賞・榎納陽君「夏の雲軍団」は、京都の人だから歴史が身近なのか、空で東西の雲軍団が関ヶ原のように戦う場面が見えるようで良かった。優秀賞・菅原結菜さん「ありのぎようれつ」は、ありの行列についてとなりの家までいったというのが楽しく、そのようすを自分の家族に見立てているのも、ほほえましい。

特別賞・水谷友理子さん「交差」は、電車で自分が英語を、隣の外国人が日本語を、それぞれ学ぶ風景に気づき、いつか二つの言語が交差する未来を願う、という希望を感じさせてくれる。特別賞・八巻愛里さん「鳥」は、四季を鳥で表現する視点が珍しく、スズメやカラスなど、ごく普通の鳥をよく観察していると感心した。特別賞・齋藤悠一郎くん「波打ち際」は、海辺を歩きながら自然災害や様々な世界の出来事に想いを致し、鯨を象徴的に扱っているところが

よかった。

審査員奨励賞・ウジエさん「記憶のベンチ」は、過去と今日とをつなぐベンチに座る「私」を、ごく簡潔な表現で客観視していて好感が持てた。審査員奨励賞・内山芽泉さん「蝉」は、庭木に蝉が「たわわになっっている」景色を見つけ、修学旅行の自分達と重なって見える、との例えがいい。審査員奨励賞・豊田葉那さん「線香花火」は、夏の終わりの象徴、そして「みんなとはちよっぴりちがう」花火として、線香花火をとらえた感受性が心に残った。

今回、地元・栗原市の小中学生が複数選ばれたこととなった。年月をかけて地力をつけてきた成果を見るようで嬉しくなるとともに、継続は力なりは本当だと感じた。

三浦 明博

プロフィール

小説家、コピーライター、日本推理作家協会会員  
宮城県仙台市在住

略歴

宮城県栗原郡築館町（現在の栗原市築館）生まれ。明治大学商学部卒業。仙台市でコピーライターとして2つの広告制作会社を経た後、1989年（平成元年）に独立し、現在までフリーコピーライター。2000年（平成12年）にシंकクエスト・ジャパン学際部門で、小学生向けのインターネット環境教育ソフト「ふしぎのとびら」によりプラチナ賞を団体受賞。同年に第46回江戸川乱歩賞最終候補。2002年（平成14年）に第48回江戸川乱歩賞受賞。2011年（平成23年）度宮城県芸術選奨（文芸部門）受賞。

著書

「滅びのモノクローム」「死水」「乱歩賞作家の謎」「サーカス市場」「畏釣師トラップーズ」「コワレモノ」「失われた季節に」「感染公告」「黄金幻魚」「盗作の報酬」「五郎丸の生涯」「ゴッド・スパイダー」「集団探偵」など。

## 新しい生活様式のなかで



渡 辺 通 子

東日本大震災後の十余年は、全国で津波、洪水、地滑りなど、荒々しい自然の姿を目の当たりにした。ウィズコロナの時代に入って、新しい生活様式を模索している現在、小中学生の詩人の創った作品は、自然との向き合い方も家族や友人との在り方も変容している現実を投影するものであった。

最優秀賞「ため息」(菅原瞳美さん)は、今に生きる中学生のカタルシスを描いた秀逸作である。やり場のない感情を吐露しつつも、夕焼けに、ひと際輝く故郷の自然に包まれ癒やされる。

優秀賞は、いずれも小学三年生の作。「夏の雲軍団」(槇納陽さん)は、夏の日の夕立前後の雲の動きを観察して、巧みな比喻で表現した。「ありのぎょうれつ」(菅原結菜さん)は、蟻の生態への興味によって生まれた作品。

特別賞「波打ち際」(齋藤悠一郎さん)は、眼前の海を眺めながら自然災害に思いを巡らした詩。鯨とペットボトルに詰められた手紙が伏線となっている。「鳥」(八巻愛里さん)は、春夏秋冬の鴉をモチーフにしたものであろうか。

「交差」(水谷友理子さん)の題名の交差とは、互いの言葉の交差をいう。私たちが使う言葉の広がりや踏まえ、練りに練った題名である。

審査員奨励賞は三編。そのうちの「蟬」(内山芽泉さん)は我が家の蟬の木の観察を通して、学校生活に重ね合わせた思いを巡らした作品。自然と友情を通して自らの青春を再認識する。

その他、選外ではあったが「秋」(鮭がおいしい季節さん)は、秋の日の午後の日差し微妙な変化やスーパームーンを捉えた感覚的な作品。「わらうバナナ」(蘇武彩音さん)は、夏海での家族のふれあいを澁刺と描いた作品。

応募総数四百二十六点のうち二十二点が予備審査を通過した。いずれも甲乙つけがたい一定水準に達した作品である。それだけに応募の際には、誤字がないかどうか、内容が正確かどうか等の確認は必須である。

渡 辺 通 子

プロフィール

東北学院大学教授、日本教育学会会員、俳人「ほの会」代表、俳人協会会員、国際俳句交流協会会員

宮城県仙台市 在住

略歴

茨城県日立市生まれ。早稲田大学院教育学研究科後期博士課程満期退学、公立高等学校教諭、茨城大学(非常勤)を経て2009年(平成21年)4月東北学院大学准教授、現在に至る。他に、宮城学院女子大学(非常勤)、早稲田大学(非常勤)。

著書

「未来都市」「鴻志」「言葉の力ー東日本大震災に捧ぐ追悼の詩」「新現代俳句最前線」「花美術館松尾芭蕉」56号監修など。



## 寄稿

## 第二十三回白鳥省吾賞を

受賞して

為平 滯

栗原市図書館（白鳥省吾記念館）から賞状と副賞を頂き、中でも栗原市特産物とお米二十キロには目を見張る。大根の佃煮を母にお裾分けしたり、精米所まで自転車の前と後ろの籠に積んで坂を上ったり下ったり。

羽釜で米を研いで頂戴した漬物や佃煮を小鉢に入れて卓上に並べる。栗原市に住んでいた白鳥省吾もそんな地元農作物や特産物を作る人や食べる人を見てきたのだな、と田畑を自転車で横切る度に浮かんでくる。

昔、実家でおじいちゃんが一輪車で、お父さんは軽トラに乗せ、お米を精米所に運んだ。白米になった米を二世帯造りの玄関の敷居に躓いて、落とさないよう気を付けながら、板の間へと運び込む。それが十代の私の役目だった。

三つ折りに袋の口を折り曲げて端の紐を捻じって括る。その袋を肩まで持ち上げ奥の台所へ——。見守っていた家族は、母一人になってしまったけれど……。

昔の家族を思い描きながら米を研ぐ。腰が曲がったままの祖母、田植えで蛭に噛まれて血だらけになった脚、金色の重い凹んだ薬缶が二つ。置き薬に頼って間に合わなかった病院……。黙々と生活できる喜びと、うつむくことしかできない事柄。それはおそらく共同体として多くの人が抱えている記憶ではないか……。白鳥省吾の詩は自然賛歌を唱えているにもかかわらず土地で生きる人々の暮らしや苦悩、佇まいをも峻厳な眼差しと慈しみをもってしたためている。

コロナ禍によるリアル対面の難しさも手伝い、抑揚のない言葉だけが人を判断し分断していく中、白鳥省吾賞の「人間愛」・「自然」というテーマは、

これから詩を書く人々にとって重要になってくるだろう。

—— 私たちは試されている。詩を書くものとして。人間として。何に寄り添い、何を大切に孤独を越えていくのか、詩人、白鳥省吾に問われている、そんな気さえしてならない。

（第二十三回白鳥省吾賞

一般の部 最優秀賞受賞者）



親族あいさつ

「白鳥省吾賞」は、白鳥省吾記念館が開館した翌年、平成十一年に創設され、今年で第二十四回を迎えることができました。これもひとえに市長をはじめとする市関係者、審査員の先生方、その他多くの方々の熱意とご努力によるものと親族一同感謝しております。「継続は力なり」と申しますが、今回も全国各地から千四百二十六編もの応募作品を頂き、ありがたく思っております。

従来、日本の詩は和歌、俳句を体系とする定形型の短詩型による抒情詩や難解な言葉をちりばめた詩がよいものとされてきました。しかし、父白鳥省吾は「詩は特別な文学形態でも無く、一部の人々の物でもなく、人々の日常生活における心の表現を言葉にするものであり、それ自体、社会性を持つものでなければならぬ」と主張し、民衆詩派の詩人として「誰でも作れる口語による自由詩」の普及に力を注ぎました。この父の考えに影響を与えたのが、米国の国民的詩人ウォルト・ホイットマンでした。ホイットマンは自由、平等、友愛の精神に基づいて、誰もが分かる平易な言葉で人間、平和、世界、自然をありのままに表現し、彼の詩集「草の葉」は現在でもあらゆる階層のアメリカ人の心の支えとして愛読されています。

入選された作品はいずれも質が高く、これからもご自分の考え、経験、想像力を「日ごろ使っている平易な言葉」で表現し、家族、友人、さらに見知らぬ人々に共感と感動を与えて頂きたいと思えます。この賞の益々のご発展をお祈りすると同時に、今回入賞された方々のさらなるご精進をご期待申し上げます。

白鳥 東五

白鳥省吾氏御令息

東京都世田谷区在住

都道府県別応募状況

応募総数一、四二六編

● 一般（高校生以上）の部 一、〇〇〇編

● 小・中学生の部 四二六編

都道府県	一般	小・中学生	合計	都道府県	一般	小・中学生	合計		
北海道	20	1	21	近畿	三重	0	8		
東北	青森	0	13		滋賀	0	4		
	岩手	0	11		京都	64	27	91	
	宮城	316	193		大阪	3	48	51	
	栗原市	313	10		兵庫	18	29	47	
	秋田	0	4		奈良	0	11	11	
	山形	0	8		和歌山	0	4	4	
	福島	0	7	小計	85	131	216		
小計	368	236	552	中国	鳥取	0	4		
関東	茨城	2	10		島根	0	5	5	
	栃木	0	11		岡山	0	7	7	
	群馬	0	71		広島	2	17	19	
	埼玉	0	48	山口	0	7	7		
	千葉	1	39	小計	2	40	42		
	東京	4	129	133	四国	徳島	0	2	
神奈川	3	60	63	香川		0	6	6	
小計	10	368	378	愛媛		0	4	4	
				高知		0	7	7	
北陸・中部	新潟	0	10	10	小計	0	19	19	
	富山	0	3	3	九州・沖縄	福岡	1	23	24
	石川	0	4	4		佐賀	0	6	6
	福井	0	7	7		長崎	0	2	2
	山梨	0	6	6		熊本	0	8	8
	長野	0	16	16		大分	0	5	5
	岐阜	0	13	13		宮崎	0	9	9
	静岡	2	28	30		鹿児島	0	8	8
	愛知	8	31	39		沖縄	0	7	7
	小計	10	118	128		小計	1	68	69
海外	0	1	1	合計		426	1,000	1,426	

# 白鳥省吾記念館

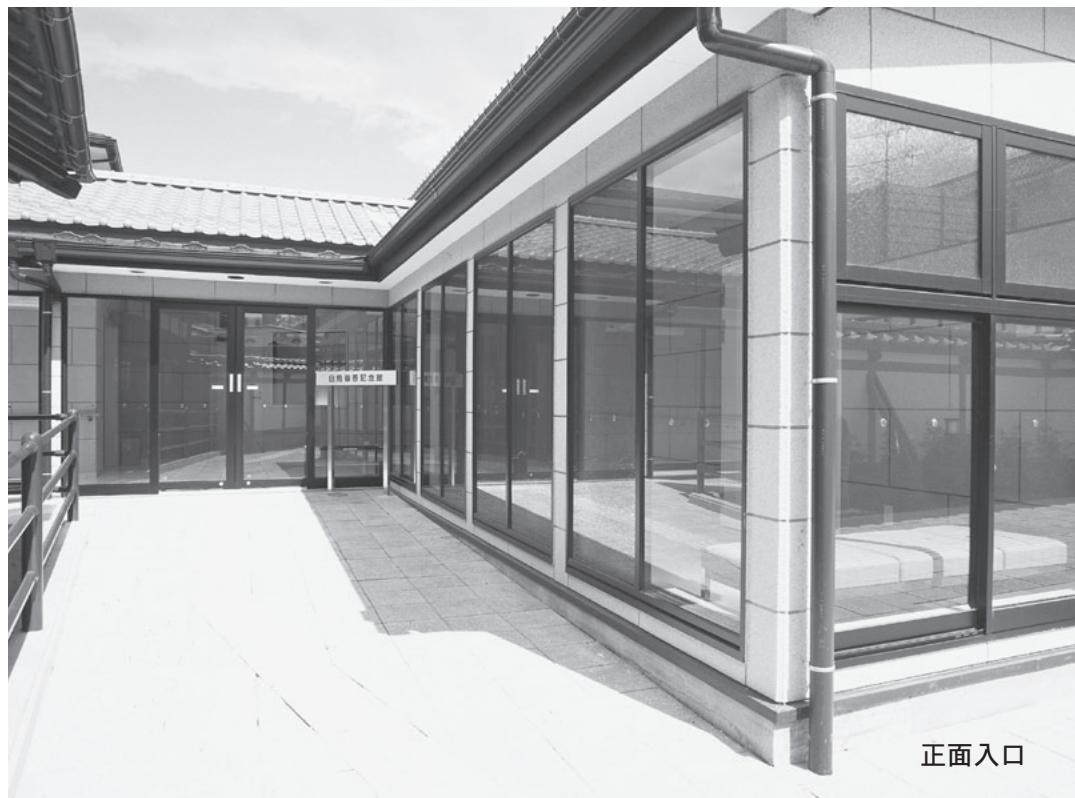
栗原市公式ウェブサイト <https://www.kuriharacity.jp>



白鳥省吾記念館  
ウェブサイト



栗原市立図書館  
白鳥省吾記念館  
Facebookページ



正面入口



常設展示室

〒987-2252  
宮城県栗原市築館薬師三丁目3番26号  
TEL 0228-23-7967 FAX 0228-21-1404

## 【入館料】

一般 210円（団体の場合は一人170円）  
小中高校生 110円（団体の場合は一人90円）  
※団体は、20名以上の場合。

## 【開館日・開館時間】

毎週火曜日から日曜日まで  
午前9時から午後4時30分まで

## 【休館日】

毎週月曜日  
国民の祝日(祝日が月曜日の場合は翌日)  
年末年始(12月29日から翌年1月3日まで)  
特別整理期間

令和5年（2023年）2月発行

白鳥省吾記念館 編集・発行